

昭和22年の大水害

一方、古利根川の増水は甚だしく、すでに北葛飾郡幸松村、豊野村は床上まで浸水した家が多くなっていた。新町橋の橋上を水が奔流し、旭町の国道も、現在の丸宮商店付近まで、床下浸水となっていた。町裏方面もまた床下浸水の家が続出していた。

同夜十時頃、内牧方面副団長から隼人堀が東武鉄道の陸橋付近と上流半繩橋の間で数カ所決潰し、耕地が浸水中との電話連絡があったので、直ちに水害警報のサイレンを吹鳴した。これにより東武鉄道は越谷駅以北は不通となったのである。

翌十七日午前五時頃、第三分団区域の川久保地内の古利根川堤防が決潰してしまい、喜蔵堤補強の土俵も押し流されて下流域の浸水が始まった。元新宿の国道ではこの激流によって走行中の乗用車が押し流され、脇の田に転落するという事故さえ発生した。川久保地内の決潰により粕壁地区の耕地は水没し、漸次水量が増加して、町並と八木崎方面を残して、大半が床下浸水または床上二十センチメートルの浸水となったのである。

なお、隼人堀の決潰により梅田地区と内牧地区の耕地の稲は、古隅田川の溢水と合わさり冠水してしまい、水深一メートルを越す処もできたのであった。

午前九時頃には春日橋が危険だとの連絡が入り、現地へ直行すると、木造の橋は激流に翻弄されてブルンと震えていたが、間もなく橋の中央部から崩れて激流の中に消え失せてしまった。

現在の春日部市内の状況は、十七日の午後には台地地域、町並、八木崎方面および各地区の高地以外は浸水し、最高は二メートル近くまで水没し、平屋建では軒下まで没する家まであった。これは特に幸松地区の被害が大きかった。役場の建物については、豊春、豊野村役場が床上浸水の被害を受けた。

この水害の間に、各所で鶏や豚や牛等が激流に流されたり、コンクリート製の農業用下肥溜が浮上して流されたり、また避難の際に、田舟を使用し転覆して激流に吞まれて犠牲になった等の事故が相当あったといわれている。各町村役場は、県の水害対策本部と連絡をとり、罹災者の救助、食糧の配給（主としてコッペパン）、衛生消毒、農産物の対策等に努力した。

この水害はあまりにも急激に襲ってきたことと湛水期間が長かったことにより、農作物はもちろん住民の日常生活への影響も大きかった。丁度稲の刈り取り前でもあり被害は甚大で、農家はこの年の供出米については非常に苦しい思いをしいられた。

古老の話によると、明治四十三年の洪水は荒川決潰による被害であったが、今回の水害はそれよりも大きかった。これは意表を突かれたためと、洪水の源が利根川にあったことが大きな要因となったためで、明治四十三年の経験より判断して対応した計画もあまり効果をあらわすことができなかつたという。

詳しくは、市史編さん室（粕壁小学校第三校舎内電話⑥1 六四四二番）までお問い合わせください※1。

初出「広報かすかべ 昭和五十四年十二月」かすかべの歴史余話

※1 掲載当時のまま作成しました。市史編さん室は、春日部市教育センターで活動しております。（平成二十八年十月現在）